

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(公)
平成20年6月1日

年表で読む 古平の歴史

[129]

◇古平信用組合

拡充五カ年計画

（続く）

一、組合員数

現在の七百六十六人を、今後、毎年平均五十人宛加入させることにし、五カ年で千人に増やす。

二、出資金

出資一口の金額は現在通り二十円に据え置き、現在出資総口数四百五十四口を今後出資の平均を二口とし、その他増口を加えて五カ年間に四千七百口、即ち出資金総額を九万四千円とする。

三、払込済み出資金

現在の払込出資金を八万一千円

を、今後加入増口分については出資一口につき毎月金一円以上払い込むことにし、五カ年間に九万三千円とする。

四、積立金

現在諸積立金九万七千五百四十一円を、今後、剰余金の処分にによる法定積立金はその限度に止め、主として特別積立金及び損金及び損失補填金の増加を図り、五カ年間に三万円以上の積立金を増殖し、各種積立金を通じて十三万円とする。

五、貯金

貯金現在高十五万六千三百二十八円を有し、新たに経済更正貯金を創設し、その他貯蓄思想を普及

し、今後毎年二万円貯金の増加を図り、五ヶ年間に各種貯金を通じて二十五万七千円に達せしめ、一組合員に付き平均二百五十七円とする。

六、借入金

借入金現在高七万九千三百二十円を有し、今後、なお出資総額及び積立金合計額の範囲内において借入金をなすものとす。借入の場合には中金、北連等系統機関を利用するを原則とし、まず以て中央金庫より特別融資金十万円を借り入れするものとし、その他の借入金は必要に応じてこれを考慮し、事業拡大の方針として五年間に最高限度二十二万円の借り入れをなさんとす。

七、運転資金

現在四十一万四千円を有し、今後、五年間に七十万円に達せしめ、一組合員当り七百円とする。

八、貸付金

固定貸付金の整理及び回収は最も至難とするところなるも、これらの整理及び回収の決行は組合拡充の最も緊要なるを以て、極力その遂行に努むるものとす。その処分方法は別途定むるところにより、

最長限度は十五年間に全部の回収を図るものとす。

一面、新たな有用貸付は資金の許す範囲内においてこれを施行し、その利息はなるべくこれを低下かつ統一し、当分別途定むるところによるものとす。そして中央金庫より特別融資金十万円の供給を受け、この内七万二千二百六十八円を本資金に繰り入れ、貸付及び整理の運用を円滑ならしむるものとす。現在貸付金三十六万五千四百八十四円を有し、今後十年間に五十五万円に達する見込みとす。

九、利用事業

発動機船を毎年一隻建造（予算三千円）漁業用に供給し、五年間に五隻を新造する。

ちなみに、

一、本組合は、法律改正による組織変更の必要なし

二、購買販売事業を兼営することとはなお充分研究を要することなので、本計画書には編入せず

三、出資一口分の金額を変更することは、たとえ余剰金のみを以て払い込みに充てる場合でも誤解を招くおそれあるにより現在の通りとす

一、速やかに農事実行組合を加入せしむること

梅野組合長は、この計画により沖合い漁業に転換すべきであるとして、同年六月、利用事業を兼営することにし、発動機船十隻を建造して組員に貸し付けることにしたのである。

◇新造船十隻が勢揃い

拡充五カ年計画は直ちに実行に移されたが、発動機船五隻の新造計画は、これまでの鯨漁の衰退とスケン漁業の近頃の発展ぶりから大幅に計画が変更され、毎年二隻ずつの、五カ年で十隻を建造することとなった。

昭和八年 第一次分

宝丸 壽丸

昭和九年 第二次分

幸丸 藤丸

昭和十年 第三次分

利丸 嘉丸

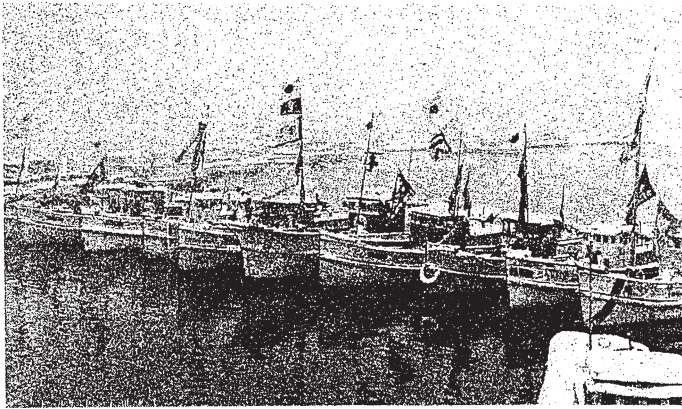
昭和十年は、また鯨漁が漁獲皆無に近く、そして漁業関係者が待望久しい船入瀬も既に完成して、スケン漁業への進出がさらに増えたことから建造計画を一年早め、翌年十一月までに四隻を建造し、

初めの計画から一年早くしかも倍の十隻を建造した。

昭和十一年 第四・五次分

富丸 錦丸 旭丸
勇丸

最初に完成した富丸は二十トンで最も大きく、当時としては群を抜く大型船で四十馬力の焼玉エンジン積んでいて、運搬船(貨物



→古平港に勢揃いした十隻の漁船

船)としても使用できる造りであった。外の九隻は何れも十二〜三トン型で、二十五馬力の焼玉エンジンであった。

これらの漁船が完成した時の様子を、梅野理事長は談話の中で次のように述べている。

「小樽及び石川県、秋田県にまで発注して出来上がった十隻の漁船が、この古平港につぎつぎとその船影を現し、町民の歓呼を受けた時の感激はまだ私の頭の中にまざまざと残っています。この計画がわが古平の鯨漁業の先駆となったと申しても過言ではないと思います。(以下略)」

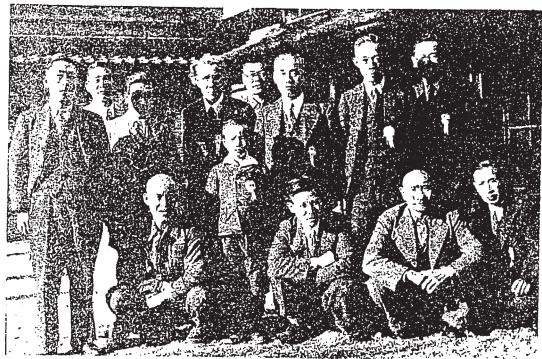
(この項 古平信用金庫『皆様とともに四十年』誌より)

◇伊勢参宮貯金と

新入児童に貯金通帳

昭和十年頃は全国的な不況がなおも続き、組合の預金高も昭和七年度から下がり続けていることから、それを打開することもあり、昭和十一年二月五日から伊勢参宮積立貯金を始めた。伊勢神宮への参拝は、江戸時代も平穩になると庶民

← 第一回伊勢参宮の記念写真



にとつての念願でもあったと言われ、特に戦時色が濃くなってきた当時は一つの流行でもあった。

第一回の伊勢参宮は昭和十四年三月、総勢五十六名が参加して行われた。

また、戦時という時代背景もあり、貯蓄奨励は金融機関の使命であるばかりではなく全国的な流れでもあったが、小学校新入児童に、入学記念として金額を記帳した貯金通帳を贈ったが、これは以後も毎年続けられた。

〜 続く 〜

昭和三年 続く

▼九月五日

起床六時、朝夕は日が余程短くなつたが、暑さはなかなかきびしい。ハル子が居なくなつて、妻をはじめ子供らまでお守りや使いなどで忙しい。なかなかゆるくない。今日も好天、しかも暑く、シャツ一枚になつている、イカも昨日からはよい人は百ぐらいとつてゐる。今日は店に居て、あちこちに手紙やはがきを七、八通も書く。気が向くときは何通でも書くが、気が向かぬと大儀なものだ。・大阪のじいさんは、三日に大阪に帰られたとのこと。今回はどこへも知らせずに行つたとて、私も少しも知らなかつた。これから・に行つてもさびしい。昨日帰りに川の端に少し水田を造つてゐるのを見たが、実に古平にとつては第一等の出来だ。こんな出来を見ると水田も好ましい。水田熱も高まるのも無理がない。私の畑の周辺も近い内に水田になるだろう。

▼九月六日

起床六時、曇天でムシ暑い、私はちぢみのジューバン一枚になつてゐる。四郎や悦はこの頃は大きいズボンだけばき、黒ん坊のように裸でゐる。本年は何時までも暑いことだ。イカ漁五〇以上もとれたとて、道具を買う客がポツポツ来る。秋までには

参りに行き二時頃帰る。吉治は久のお守りをしてゐる。余りに暑いのでタライ湯を沸かす。子供たちも大喜びでサツパリした。久は湯が好きなのか、いつもおとなしく入つてゐる。店務を終えてから、外へいすを持ち出して涼む。余市からの自動車、明かりをつけて勢いよくやぶ長前に止まる。何時も客がありずい分

高野名事作さんの日記から

当時の世相を見る

(136)

また大漁であつてほしいものだ。旭日生命の保険証を出して見る。大正一〇年から毎年七〇円を七年、約五〇〇円の元金を掛けて来たが、これが戻らぬとなれば実にバカバカしい。これなら貯金か、信用組合の株で持つておれば良かった。これからは注意せねばならぬ。一〇時頃、妻は支店のスエちゃん七回忌でお

繁昌している。暗夜にあの山道を通るのは気味が悪からう。八時頃から空が暗くなり雨が降り出す。よい雨だ。沢山降つて少し涼しくなればよい。

▼九月七日

起床六時、熊さんは相変わらすカラス番で五時頃行く。14号の出盛りで一斤四錢五厘で卸

している。一〇年は七、八千斤も出たが、本年は七、八百斤ぐらいで、一〇分の一になつた。外の種類も皆一割ぐらいになつてしまつた。昨夜はまだ降るだろうと思つてゐたが大して降らず、今日はまた快晴、風があるがムシ暑い。ジューバン一枚になつてゐる。裏に植えた茶の木が伸びたが、なかなか面倒なもの、今のところ一〇本のうち二、三本だけだ。イカ漁五〇〇六〇とれたというので、道具が少し売れていく。裏では薪切りが来ているが、この暑さではなかなかゆるくないようだ。今日は八月十日に改選された道会議員の初会議だ。古平から選出の種田さんも初舞台に出るのだ。大いに半島のために頑張つて尽くしてもらいたいものだ。ムシ暑いので今日もタライ湯を沸かす。久は風呂が大好きなのか、おとなしく気持ち良さそうに入つてゐる。早くこの暑さもいつて、ぶどう、きのこ取りの季節になつてほしい。私はあの頃の季節が好きだ。本年はぶどうの成り年とのこと。二、三回は山遊びに

行こうと思つてゐる。実に寿命の延びるような気持ちだ。樺太の豊原・真岡間の鉄道が開通する。

▼九月八日

今日は珍しく五時半に起床、戸外に水をまき庭掃きをやる。朝早く起きて運動することは体によいことだ。浜にゴミを投げに行く。上ナギだ、イカつけの発動機船がどんどん入港している。今日は余り無かつたようだ。沖には帆船が二隻停泊している。カムチャツカ戻りならん。大謀網も五日から網を入れているが、今までのところ余り漁が無いとのこと。しばらく振りに浜へ出て見たが、朝の浜は特に気持ちがいい。毎日馬車屋が石を運搬している、美国までの新道工事に使用すること、目下盛んに工事中だ。九時頃自転車、井田へリンゴを持って行く。今日もムシ暑い。夜、大へ遊びに行き世間話をする。本年の不況でやり繰り算段も尽き、足の出るところが沢山あるとのこと、貸し方も注意せねばならぬ。一〇

時帰る。

▼九月九日

熊さんは朝早くから煙筒掃除をするというので、私は五時ころ起床、畑へカラスの番兵に行く。畑はまだ露が沢山、カラスも早二、三羽が見える。手籠を持ち樹の下を廻り落ちリンゴを拾う。14号はおいしくなった。上の畑から下の畑まで拾うには時間がかかり、七時頃ようやく終る。五〇斤 (三〇kg・一斤約〇・六kg) 程も落ちてゐる。旭など玉が良く色つきのよいのが、一本の樹で二〇個程も食べられ落ちてゐる。実際カラスの被害は大きい、悪い鳥だ。トマトには手柴を立てワラでしぼる、見事に成つてゐる。トマトは割りに手数もかからずよいものだ。近ごろはトマトの町売りもリンゴ以上に売れてゐること。時代はいろいろと変わるものだ。ケイトウなどの花も見事に咲いている。七時半過ぎ、熊さんが弁当を持って来てくれたので、板倉の前にムシロを敷き、わらのまま弁当を食べる。自然の

天地草木を眺め、虫や鳥の声を聞き浮世はなれた仙境に居れば、寿命もますます延びるようだ。筋子にキウリの漬物だが山海の珍味だ。人間は壮健で働くことが何よりの薬だ。一時帰る。午後二時頃、八の姉さんが子供たち四人を連れて遊びに来たが、妻が農園へ案内して行く。子供らも皆ついて行き、大勢で14号、キミ、スイカなど食べて楽しかったと言つて五時頃帰る。タライ湯を沸かす、久は大喜びだ。

▼九月一〇日

昨夜五時頃から暴風が吹き始めたが幸い午前二時頃には止み、雨になつた。夕立のようなはげしい雨がときどき降る。この雨が八月中に降ってくれたら作物にも良かったし、涼しく凌ぎやすかつたであらう。しかし秋大根などにはよい雨だ。この雨の後は涼しくなるだろう。熊さんは農園行き、リンゴが風でどうしたかと、未明に雨の中を行つた。洗面後、裏の花畑を見たが、ダリヤは風の害も無くよ

かつた。店はイカ不漁だが、スケソ縄、カレ網などが準備期になつたので忙しい。新聞によれば今日は長輪線の開通式、千五百万円と一〇年の年月を費やし、噴火湾の風光明媚の地を通る便利な鉄道が出来たのだ。室蘭や長万部では盛大な祝賀会があるとのこと。積丹半島の鉄道開通式を挙げられの何時、敷設予定線に入り、今冬の国会にも提出されるとのこと、それなら割合早く進捗し、七、八年後には出来るかも知れぬ。早く開通祝賀会でも挙げられるようになりたいものだ。午後四時頃農園へ行く、昨夜は風が強かつたが割りにリンゴが落ちず、一〇〇斤程だつたとのこと。買人が来て皆売れた。明日は命日なので花を手折る、今は浦島、オランダ菊が花盛りだ。持つて帰ったら皆きれいだ皆お喜びだ。雨の後は余程凌ぎやすくなつた。

※長輪線 国有鉄道長万部、輪西間全通、これによつて函館本線と室蘭本線が結ばれた。また同時に静狩、伊達紋別間も開通した。

▼九月二日

熊さんは朝の内は何かと用向きがあるので、私が早く農園へ行くべく五時に起床、出かける。朝の風は冷ややかで単衣一枚だとヒンヤリとする、やはり秋だ。畑方面の方から美国道路への出面に行く人たちが七、八人通る。工事でも大分進捗しつつあるとのこと、秋までにはよい道路が出るだろう。畑では早速リンゴ拾いにかかる、割りに落ちておらぬ。花畑の菊、本年植えたのがよく育っている、枝を切ったり蕾を取ったり、竹を立てたりして手入れする。菊は寒さにも強く、元氣よく咲く重宝な花だ。殊に本年は御大典もあるので、よく手入れしてやらねばならぬ。14号を買う客が来たが、ちょうど熊さんも来てよかった。私は菊の手入れをして、一〇時頃帰る。命日で和尚さんが来られるので、妻は何かと忙しい。私も手伝いする。午後三時頃の便で、依頼を受けた古平町長候補者根□□(二字不明)から、依頼状と写真が来た。

再三の依頼ゆえ、夜、米田助役のところへ行き事情を話す。話を聞けば、今のところ候補者には面倒らしいとのこと。明日でもしかるべく返事をするつもり。平田製網へ六寸五分二万間を(直二〇)で注文した。

▼九月二日

五時に起床し、今日も畑へ番兵に行く、まだ薄暗い。洗面していたら熊さんが来て板戸を開ける。私は早速出かける。曇り空で時々小雨の降る天気、雨の後は日増しに涼しく、今朝などはヒヤヒヤする程だ。手籠を持ち落ちリンゴを拾う、五〇斤程あった。本年はカメ梨の豊作で、実に何十年ぶり。余り成り過ぎて枝の折れたものもある。一房に四つも五つも成っている、小樽へでも一房持つて行ったらよい土産ならん。小雨が降ったが大したこともないので、菊の手入れや草刈りをやる。八時頃熊さんが来て、私は家に帰る。妻はなかなか忙しそうだが、トミ、吉治はお昼まで学校なので、帰れば拭き掃除なども手伝う。一

二時頃の船で、カムチャツカへ行つた漁夫団が帰る。バスケットに土産など入れて持ち帰る。三ヶ月ぶりなので家でも大喜びならん。本年も大漁したとて景氣がよい。大漁半天(半纏)は(んてん)などを着て帰るのっている。夜、主人が小樽から帰られたので話しに行く。聞けば岡崎おばあちゃん、その後もはかばかしからずとか、大切な人であり全快を祈る。古平へ貨物自動車が出来て、町中を試運転している。皆珍しがって見ている。

▼九月三日

五時起床、早速農園行き。小雨がポツポツ降る。リンゴを拾ったが二〇斤程落ちていた。花畑の手入れをする、菊も春先植えたのが成績よい。明年春植え替えて、大輪菊も畑の方がよさそうなので植え付けるつもりだ。七時過ぎ熊さんが来たので、ひと休みする。朝早く起きて農園で働くのは実によい業だ。人間は健康が第一だ、壮健であれば何でもおいしく楽しい。病氣は一番の不幸だ。本の愛子さん

は不快で、夏休み後から家で休んでいる。私の家では家内中皆無事、子供らも皆壮健、幸治、文治などは入学以来一日も休まず励んでいる、天に感謝せねばならぬ。八時頃帰る。一〇時頃から雨になり、なかなか止まぬ。一ヶ月も前に降ればよい雨だったが、曾我さんが来ているいろ話す、夜になって雨はますます降る。雨の中ソへ行き縁談のことで話し、おいしいスイカをよばれる。種を貰い一〇時半帰る。雨は相変わらず降り続け、夜分は涼しくなった。

▼九月四日

起床五時半、昨日来の雨は引き続き降り豪雨となった。私は洗面早々長ぐつにゴム外套を着て出かける。・横の共栄丸寺田や、新保写真屋の辺は小川のように水が流れている。本間万蔵さんは窓から顔を出し、大水にならなければいいがと心配している。この雨でも、例のカラスは早リンゴ畑へ来てカアカアやっている。一発撃って驚かし、熊さんとリンゴを拾う、三〇斤

程あつた。ハギの花がきれいに咲いて見事だ、柵をこしらえてやるとフジのようだ。十五夜さんは二十八日から、それまでには散るだろう。八時、熊さんが来て、交代して帰る。この頃から雨も小晴れになる。朝食後、久、カさんと三人で、恵比須神社祭礼の寄付などで歩く。

余興のことなども話し、二〇軒余り歩き、一五円程の寄付が集まる。美国でも本秋からスケソ船二隻やるとてヤメ糸を買いに来る。冬になって漁があれば賑やかならん。正午頃から一天雲なき晴天になった。雨後の涼風は気持ちがい。夜、支店へ行き、生け花の先生の教授ぶりをみる。これを見るとどんな花でも生けるによいものだ。よい楽しみ方だと思ふ。一〇時半帰る。

▼九月一五日

祝聖会の例会日、目覚まし時計を四時半にかけておいたが、四時半前に目が覚め、起きてから時計が鳴った。洗面後、14号五斤程とお花を二束を用意して持参す。町は薄明かりだがガ

ラス戸を開けている家もある。寺に着いたら五人目であつた。朝早く静かな本堂で、声を張り上げ読経するのはよい精神修養と運動だ。病院に入院している人もあるのに私は壮健、そして子供らも皆無事で何より喜ばしい。終つて和尚の部屋で持参のリンゴを出す。いろいろと時事を談じ七時帰る。帰途は万蔵さんのところの菊を見たが、丹精して上手に出来ている。大豆大の蕾が沢山着き花盛りは見事である。スケソ縄、ヤメ糸が大いに売れていく。古平町長候補のこと、地元説が有力である。朝夕涼しくなり、蚊群も見えず寝

ぎやすくなった。

▼九月一六日

起床五時、ひと雨毎に寒くなり、単衣一枚ではヒンヤリとする。セルの単衣にジュバンでちようどよい。町はまだ薄暗い、朝早く起きての運動は気持ちよい。今朝も二〇斤程リンゴを拾う。菊の手入れをしていたら熊さんが来る、ネギを取り八時半帰る。今日はヒヤヒヤする程涼

しい。黒ンボの四郎でも上着を着ている。幸治から葉書が来る。一八日頃、教練で演習のため、旭川の七師団に行くとのこと。

明春は卒業なので、軍隊生活の経験も必要なのだとのこと。壮健で、本日まで一日も学校を休まぬのは幸福だ。八田鉄道次官、過日の長輪線開通式に出席、本日札幌に滞在とのこと、本主人、米田助役が鉄道請願のことで出札す。横山町会議員、今度また会社を作つて樺太からオットセイ二百頭余りを買入れ来てたとのこと。何の事業をするのか、なかなかやり手である。

▼九月一七日

起床五時一〇分、今朝の寒いこと霜でも降りそう。先日まで暑い暑いと言っていたのに急に秋が来た。セルの単衣にジュバンだけでは寒くなった。農園を一巡してリンゴ二〇斤程拾う。花畑で菊の手入れをしていたら熊さんが来て八時帰る。帰途、万蔵さんのところに寄り、カラスの害について何とかならないかといろいろ話す。春の鎌場

からイカ、イワシ、スケソの損害、それに畑作物の損害を加えたら古平中でいくらになることだろう。何とか善後策を立てねばならぬ。トマトは手入れが良かったのか見事に成っている。私のところもあんなふうに入手れせねばならぬ。帰つて共栄丸で、岡崎、金子、幸治のところへ14号を送った。ちようどよ

かった。午後一時から恵比須神社で、祭礼寄付金を持ち寄つて協議す。寄付金は合計で一五〇円程集まった。余興の費用に三〇円、自転車競争と盆踊りをやることにした。四時頃帰つたが今日は寒かった、シャツを一枚着る。14号もいよいよ終わりになる。余市、古平などの鎌場では合同経営の機運が熟し、今回成立の協議があるとのこと。世の中はいろいろ変る。横山町議、製薬会社設立の披露宴を今夜、美登利亭で開会、町議連を招待するとのこと。

▼九月一八日

起床五時、農園行き。朝風の寒いこと初冬のように。ワラジ

掛けて見廻る、一〇斤程拾う。
甚内さんと万蔵さんのところでは粟にスズメがつくので、ガンガン（缶）を叩いたり、どなるやら、はたから見ているところっぽいようだ。朝のうちは手も冷たい程だ。七時頃から旭日がさしてきて、すこしボカボカする。熊さんと平さんがイモ掘りに来たので、八時頃帰る。スケソ縄が勇丸で来た、荷を揚げるので直ぐ行く。帰って恵比須神社祭礼のピラを一〇枚書く。店の客もあり、一枚書いている内に三度も立たねばならぬ。夜になるとさらに寒くなる。今日、幸治らは午前九時小樽発車、午後三時頃旭川着、演習後は露営することのこと。共産党事件の発表があり、北海道で六一名が起訴されたとのこと。

▼九月一九日

起床五時、番兵に農園へ行く。昨日よりは少し暖かいようだがまだ薄暗い。旭やカメナシなど一〇斤程拾う。14号はない。終って菊や秋植え球根を植え付ける畑の準備をする。熊さんは

七時半頃来る。今日は命日なので、リングやキャベツなどを持って帰る。店はスケソ支度で忙しい。熊さんは午後から材木会社へ行き、おがくずを俵で三俵運ぶ、本年から試験にのこくずをたくつもりだ。畑のカラス、誰も居らぬので荒れているかも知れぬ。時々小雨が降る。

▼九月二十日

起床五時、農園へ行き一巡したが、旭とカメナシで二〇斤落ちていた。今日は割りと暖かい。菊の手入れとグラジオラスの球根を掘り起こす。熊さん七時頃来たので私は家へ帰る。今日は恵比須神社祭礼、旭とカメナシを神前にお供えする。一〇時から式があり参拝す、一一時終る。種田干場では自転車競争がある。とて、子供らが見に行く。今日は暖かい天気になり、戸外に出ると暑いぐらいだ。幸治から葉書が来た、一八日、午後三時旭川着。二十六連隊營舎に宿泊、兵隊と同じ食事、起床その他、ラッパでやっているとのこと。二一日まで演習があり、二一日

午後二時小樽帰着とのこと。夜、学校で早稲田大学出で、一〇数年来欧米に居られた五明氏の精神修養の講演があり聞きに行く。有益な話であった。

▼九月二二日

今日も相変わらず農園行き、カラスもうるさいが、スズメもなかなかせわしい。甚内さんや万蔵さんのところでは、切れ間なくカン叩きをしている。七時半帰る。スケソ縄が入ったので知らせる。平ばあさんの三回忌が九時からあるが、妻が齒が痛いというので私が行くことにした。急いで自転車で行ったが、和尚さんのお勤めが始まっていた。お参りしご馳走を頂き一一時帰る。恵比須神社祭礼の後始末に行き、会計、その他をやる。ソーマンにお酒が出て三時過ぎ帰る。夜、学校で五明氏の講演が今日もあるので聞きに行き、一〇時帰る。小樽の山本代議士の長男、二五歳で本年大学を卒業し三菱銀行に勤めていたが、一四日急に発病し、一九日急性肺炎にて死亡せりとのこと。前

途ある身、実に気の毒なことだ。一家の不幸は何時来るかわからぬものだ。

▼九月二三日

例の通り五時二〇分農園行き、陣内さんと万蔵さんのところでは相変わらず粟畑にスズメが来るので、鳴子やガンガンを叩いてい。陣内さんのところではガンガンを一つ持ち、叩きながらホーイ、ホーイと言いつつ歩いていく。作物を育てる苦心は並大抵ではない、これと思うと粟一粒でも粗末にならぬとツクツク感じる。八時、熊さんが来たので、花を手折り持ち帰る。土場方面の人がキノコ取りに沢山行く、私も行きたいが無人になるので行かれぬ。度量衡検査員が来ている話。夜、平田さんと恵比須神社祭礼の支払いに歩く。後、大に寄り、しばらく話しをして九時帰る。

— 続く —

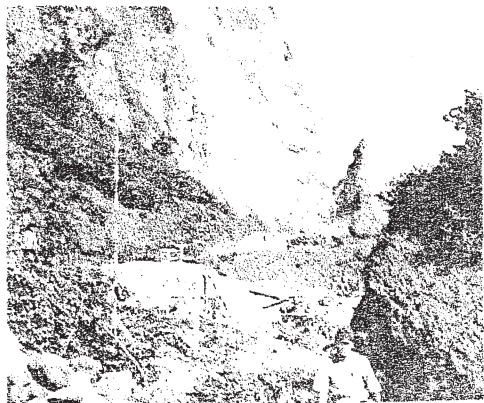


セタカムイ

3)

(第3種新設(仮)道路)

つひ 海 道 築 片 温 戸



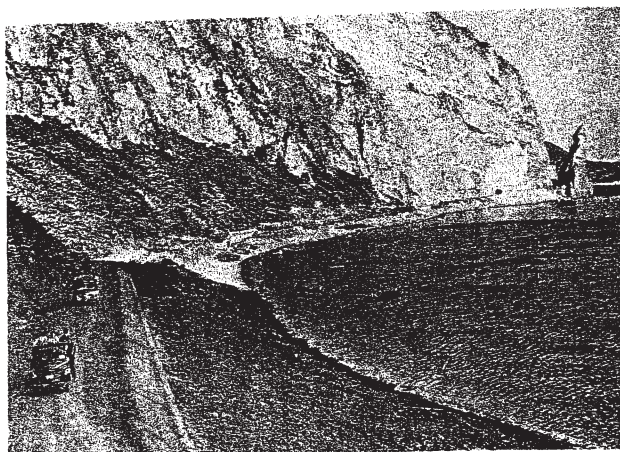
↑ 着工間もない頃の埋め立て工事



↑ 埋め立てで完成した白岩町海岸道路を走るバス
国道を走る車に手を振る地元沖町の人たち →
チャラセナイトネルから豊浜町方面を見る ↓



↑ 開通間近のセタカムイライン



↑ 開通～未舗装の道路を走るバス



～新聞と写真で見る～

町内の学校探訪

古平小学校

◇修学旅行

明治三十九年の卒業式は、三月四日に行われたが、この時の高等科修業生代表武田ミキの祝詞の原稿が保存されている。

この年九月、高等科の生徒三九人が、札幌で開催の北海道物産共進会を見学するため修学旅行を行つたが、これは札幌方面への初めての修学旅行であつた。

翌四〇年一〇月九日、高等科二年生の男子生徒四八人を、担任教師二人が引率して余別村まで遠足し、永坂福太郎漁舎に一泊して、翌日全員無事に帰町したことが、当時の来岸村・米田日記に記され

ている。

◇小学校令の改正

明治四一年三月、勅令(明治憲法の下では、帝国議會を経ないで天皇の権限による命令)によつて小学校令の一部が改正され、翌四一年四月から小学校義務教育年限が延長され、尋常科は四年制から六年制となり、教科の科目は修身・国語・算術・日本歴史・地理・理科・図画・唱歌・体操となり、裁縫は女子の正科目となり、隨意科目として手工(しゅこう)Ⅱ現在の工作に相当する)が加えられた。高等科は二年制とし、それまでの科目に隨意科目として、尋常科

と同じく手工が加えられた。

この尋常科・高等科の就学年限はそのまま終戦後の六・三制の学校制度の実施まで続いた。

明治二八年、小学校規則が告示され科目に唱歌を加えたが、新北海道史によれば「明治三年、オルガンを備えた」という記録がある。

小学校でも児童・生徒の身体検査と、学校医による検診が行われていたが、これまで学校医についての手当が無かったが、明治四〇年から町予算に計上し支給された。

◇再び校舎を増築

年々就学児童数が増加したが、校舎に児童を収容する余地がなく、再び二部授業を実施し、新年度の校舎新築が計画された。

明治四一年二月の町会(町議會)に古平尋常高等小学校校舎増築について、次のように建議案が提出された。

建議案

一、古平尋常高等小学校校舎増築の件

説明

本校は目下教室が狭隘のため二

部授業を行っているが、理事者は四十一年度において、校舎増築のため、四十一年度予算議出臨時部に五千二百八十円余りを計上していた。しかし、年々学齡児童の増加により校舎の不足するのは必然にして、今姑息の修繕をするより、むしろこの際相当の敷地を選定し、増築することが適當と信ずる。最もこの建築費は本年度一時に賦課徴収することは、到底町民の負担に堪えないところであり、建築概算およそ一万三千円と見積もり、うち一万円は町債を起こして起工せんとするものである。

右建議す。

明治四十一年二月二十六日

建議者

町會議員

齊藤兼太郎

賛成者

町會議員

村井隈太郎

同

名達 文吉

古平町會議長

古平町長 高野常吉殿

古平尋常高等小学校増築予算

校舎木造二階建 九、一二〇

屋内運動場 二、七〇〇

接続廊下 六九〇

便所

五四〇

敷地買上費

一、〇〇〇

設計費

二二〇

設備費

六〇〇

校具費

六〇〇

合計

一五、四八〇

この増築案は小学校校令の改訂により、明治四一年四月一日から尋常科六学年、高等科二学年制を実施するためであつた。しかし、校舎の竣工まで尋常科一、二、三学年の六学級は依然として二部授業を継続しなければならなかつた。

町会ではそれまでの高等科に加えて、尋常科五、六年生からも授業料一ヶ月二〇銭、二三〇名の一ヶ月分として五〇六円を徴収することとした。

また、増築校舎の建築単価を坪当り五〇円、屋内運動場・便所を二〇円、廊下を一七円、さらに敷地価格を半額の五〇〇円に削減して増築案を決定した。この工事は四一、四二年度の継続事業とし、八月北海道庁の許可を得た後、一〇月から校舎敷地の地均し作業が始まつた。

◇戊辰証書

明治三十七、八年の日露戦争において日本が勝利したこと、次第に国家主義教育に進んだが、道徳の高揚や勤儉をすすめ、国防教育の根本ともなる「戊辰詔書」が一〇月一三日に發布された。

明治四一年（一九〇六）は干支でいう戊申（つちのえさる）に当ることから「ぼしん詔書」と言われ、教育勅語と並んで教育方針にも取り入れられ、祝日には必ず奉読され、生徒を通じて家庭にも浸透させるようにした。

（昭和の時代になつてからは、祝日には教育勅語だけが奉読されるようになり、戊辰詔書は發布された日や、教室で修身の時間などに奉読された）

◇同窓会の設立

明治四一年二月二日、古平同窓会が設立された。会則を定め、会長に山本校長を推薦した。八月五日総会が開かれ、役員を次のように選出した。

米田惣太郎	松尾市太郎
関口 昌	高野勇次郎
奥野春治	本間ミツ
宮崎喜太郎	山口市治

和田キン 墓目キミ
松座タヨ 北山重太郎
加賀谷武吾

この総会で、学校に図書館をつくることを決定し、その方法は役員に一任された。

また、総会では奥野春治、岩淵三樹蔵町長の演説があり、余興として、蓄音機によるレコードの鑑賞、日露戦争の実談、尺八・琴の合奏などの外、福引きも行われ大いに楽しんだ。

翌四二年八月の総会では、図書室基金について協議し、全員から金一円を集めることや、図書の寄贈などについて決定した。

その後は毎年一月と八月に総会を開き、昼食係、余興係において盛会であつた。

明治四五年度の総会には、群来小学校青野校長ほか七〇余人の出席が記録され、同窓会は町内の小学校全校を併せて行われていたようである。

大正六年八月、中村重次郎校長を同窓会長に、関口道三郎を副会長に推薦したが、その後は年二回の総会が一回になり、余興なども行われなくなつた。

念願の校舎増築を前にして明治四二年四月、就学児童数はさらに増え続けて一七学級にもなり、またまた二部授業を行わなければならない事態になり、次のように告示して行われた。

明治四十二年三月二十日告示
古平尋常高等小学校尋常科第一、二、三学年に対し、本年四月一日より同年九月末日まで二部授業を施行し、その教授終始時刻を左の通り定める。

古平町長 岩淵三樹蔵
（時刻表は省略）

前の部 午前七〜九時に始業
午前二〇時〜正午までに終業
後の部 午前二〇時〜午後二時に始業、午後一時〜四時までに終業

前と後の交代は一週間毎とする
明治四三年一〇月三〇日、町民や児童が希望の増築校舎が竣工し、この二部授業は一〇月三一日限りで廃止された。

（続く）



花物語

大 澤 文 子

本州各地の梅雨もあけ近く夏本番だ。

早朝からカツと照りつける太陽に、小庭いっぱいの花ばなは鮮やかな色彩をかもした。

青一色の今朝の空は今にも何かを奏でそう。

「うーん いいなアー」

Ⅱいつか私は水を打ったような爽やかな朝の駅のホームに立っていたのだ。やがて速度を落とした列車は、今や遅しと勤務する人ら待つホームに驀進して来た。

忽ち起こる風は短めのわが髪をなぶらせる。そんな時、何故か心から快感を覚え「よし！」今日も一日がんばるぞーと心に誓うのが常だった。

また、読書の場所として何時も列車の隅の席に陣取り、好きな

書物を読みあさることにしていた

が、近年とみに視力も衰え車中での読書は中止した。その代わりというか…心の中で色々な問題を自問自答し楽しんでる。

葛藤の場となることもしばしばのこと。真剣に何かを考え葛藤し、

その答えを求めわれを忘れることも多々ある。

そんな時「お客さん！ お客さん終点ですよ、小樽ですよ！」と駅員に肩をたたかれることもし

ばしばのこと。ふとわれにかえり駅員さんに深々と礼を言い、誰もいない車中から小樽駅のホームに飛び降りることもままある。

そんな時「交通事故にはくれぐれも注意してネー」と、親切に注意してくれる歌友を思い出すのが常だったが…Ⅱ

ふとわれにかえり厨辺にふつふつと匂いたつコーヒーの香に慌てて部屋に戻る…と、小庭の片隅に咲き誇る紫の矢車草を見つけた。ふと手に触れた一輪を手折り食卓に飾る。

そうそう矢車草と言えば父の大好きな花だったわけなア…。今更ながら懐かしく想い出す。

生前…矢車草をこよなく愛した父は、母の誕生日に京都の染め所へ依頼し細の帯を贈った。父の大好きな藍紫の矢車草を二輪…白色の細の地に散らしたものであった。

やさ型の母によく似合ううれしそうな母の笑顔を垣間見て、子供心にも楽しく、姉と一緒に母のあとを追いつつ帯にそつと触れてみるのだった。

今でもあの時の母の笑顔を忘れることはない。

そんなことを思い出しながら、おそい朝食をひとり楽しんでたが…ふと思った。

父の大好きな花はいつも矢車草と口ぐせのように言っていたが…いつか母の好みの花は…なに？と思った。

母は何事も几帳面なひとで、到底まねの出来ない事柄が沢山あったが…いつかしみじみ話してくれた母の言葉を思い出した。

まだ父母達の若かりし頃、新潟市に居を構えていたが、庭が広かつたので母はコスモスの種を沢山蒔いたという。花の咲くのを楽しみにして水やりはかかすこともなく大事に育てていたという。やがて丈高く育ち、沢山の蕾をもち花咲くを待っていた…その真夜、大暴風の襲来に遭い、すべてコスモスは蕾のまま地面に薙ぎ倒されてしまったという。

母は泣くにも泣けない思いにくれていたが…数日後、嵐も収まり恵みの太陽が照り続き、コスモスは薙ぎ倒されたままの姿で花を咲かせたという…

その花の「強靱」さに驚き母は泣いたという。

コスモスの花の『強靱』さ、その時も涙を浮かべて話してくれたあの時の母…

「撓やかで強い花コスモス」それ以来母の花は、『コスモスに決めたよ！』母の声が好き…えそう…

三度目は絶対に御免である

葛 西 庸 三

私は茅葺の屋根の貧乏な農家に生れた。棟続きの中に馬小屋や鶏などを飼う小屋があり、広い庭を挟んだ向い側にやはり茅葺の納屋が建っていた。

農耕馬のほかに、昼は放し飼いにしている三十羽ほどの鶏と山羊、アンゴラ兎、それに「むじな」などがいた。豚もいたと思う。

私より十五歳年上の長兄は病弱で農作業ができないので、鶏の玉子を岩内の街へ持つていつて捌いたり、アンゴラ兎の毛を売ったり、むじなの毛皮を売って小銭稼ぎをしていたようであった。

しかし、いずれの小動物も、長兄が飼いはじめる頃にはブルムが下火になっていて、思い通りの収入にはならなかったという。

ただ、鶏の玉子だけは需要があると見え、雛を育てて数を増

やすことに努めていた。

雛は、半径が一メートルほどの刳殻を敷いた円形の容器の中で飼育していた。その容器の真ん中に暖を採るための炭火を入れた短い円筒が置かれていた。

ランブ生活だったので、雛の育て方も原始的な方法であつた。私が小学校一年生に入学して間もなくのことであつた。雪が少ない土地であつたので、周り一面は新緑に包まれていた。昔も今と変わりなく、入学当初は早めに下校する日が続いた。

その日は朝から細かい雨が降つていた。学校から帰つた私は、新品の黒いランドセルを仕舞い、これまた新品の洋服を脱いで汚れた普段着に着替え、昼食のテーブルに着いた。父親は何かの用事でいなかった。

朝食を食べ始めて間もなく、鶏小屋の方から灰色の煙が居間

に流れてきた。

「火事だ」と誰かが叫んだ。兄達は馬小屋に走つた。私はまだ小さかった妹二人を連れて小屋の外に飛び出した。

茅葺の家は、あつという間に火の海になった。兄達は馬を出すのに手こずつていた。炎の海を見ておじけつた馬は暴れ回り、小屋から出ようとしな

い。農家にとって、馬は貴重な財産だ。死なせる訳にはいかない。

棒で尻を叩き、喚き散らしてやつと小屋から出す。茅葺家は全焼だった。

家の中から運び出した薄汚れた藁蒲団一枚だけが、茫然自失している家族を嘲り笑うかのよう

に、小雨の中で濡れていた。なけなしの金を払つて買つて貰つた新品の服も靴もランドセルも、新しい教科書も、一瞬の内に灰となった。白い小犬の付いた鉛筆削りが私の臉から消えなかった。

火事の原因は、鶏の暖を採つていた煙筒の炭火が過熱して、周りの刳殻に燃え移つたことであつた。

私は何日か学校を休んだ。間

もなく校長先生が来て、みんなから集めた見舞いの金や、着古した洋服やランドセル、文数の大きい長靴や上靴、上級生が使つた教科書などを届けてくれた。私はダブダブで両手が袖から隠れるふくを着て、ブカブカな靴を履き登校した。異様な服装でも、誰も馬鹿にしなかった。

さて「地震、雷、火事、親爺」という諺がある。人々の恐れるものをその順に並べたものだが、民主主義の今日は親爺の上げはほとんど影をひそめているが、その外は今も言葉通りだ。

私は昭和五十六年四月に、古平小学校から余市黒川小学校に異動した。その年の十一月六日、黒川小学校は子供の火遊びが原因で半焼した。その時、古平の多くの人達からご支援をいただいた。

二度あることは三度ある」という諺もあるが、三度目の火事は絶対に御免である。

それにしても私は、小さい時から周りの人に多くの迷惑をかけ、世話になる人間であつた。有難いことだったと思う。

短歌

古平町岬短歌会

農園をよろこびて継ぐ若夫婦保ちゆけかし明るき笑顔

池 田 テ ル

咲き終えて風に吹かれしタンポポの小さき種はいつこにぞ咲く

金 子 寿 子

公園は木々と花だんに囲まれて初夏へ風情一日癒さる

坂 本 信 子

アカシヤの坂のぼりゆく学童らお早ようと言ひ我を追ひ越す

鈴 木 時 子

歩く事只それだけ为目标に友と一緒にリハビリ励む

田 中 香 苗

ほくほくと口に広ぐる旬の味友の届けてくれし竹の子

玉 谷 美 都 子

満開の白き牡丹は吹く風に花びらすがしく大きく揺るる

丹 後 初 江

風強し砂ぼこり舞ふ校庭に懸命に競ふ紅白リレーは

寺 田 カ ツ 子

春穂日蔭摘むと夫と登りこし小高き丘に青葉の茂り

仲 谷 喜 美 能

故郷の従妹より来し新茶汲み夫との話題久にふくらむ

東 美 知

潮風うす紫のりらの花揺れてほろほろ庭に散りゆく

堀 典 子

俳句

古平俳句会

海原の光り清かに磯うらら 越野 清 治

春潮に凜と浮き立つローソク岩 斉 藤 波 留

春眠に訪ふベルの音うとましく 山 口 悦 子

新緑に育む牛の斑肌 越 野 敏 雄

似し者の同志集ひて春の宵 大和田 絵 伊

一叢の一人静や山の宿 高 橋 重 子

手分けして残雪処理し牧開き 外 山 俊 久

きれぎれの記憶の固執もえて春 堀 典 子

そこだけが明るさ満ちて山桜 渡 辺 嘉 之

春光に平伏してゐる岬の波 室 谷 弘 子

春潮や白き巨船の遠汽笛 仲 谷 比 呂 古

金いろの矢車風に鳴り出でて丈余の緋鯉おほ空泳ぐ
空に舞ふ入営の旗とからみ合ひ旗の出し入れ我も手伝ふ
花吹雪にまかれてゐしが叔父上を死なせし戦ひに思ひ到れり
花ふぶく中に別れし叔父上は常に若くして挙手の礼をなす
叔父上を偲びて佇てるわが肩に散り来しさくら無限に重し

叔父上を偲びて

瀧 内 優 子

五月二十七日海軍記念日本陣の浜より発ちし賑々しくも
レイテ湾の海に散り行きし叔父上よ千の風になり見守りおくれ
庭の辺の桜花いくひら部屋内に舞ひ来たりて踏みなづみある
夜明けには未だ間のある暫らくを木木の諸葉はねむりをほどく
それぞれの土に還らむ季持ちてきほへり一葉一葉のみどり

◆ 編集雑誌 ◆

▽巻末の「古平町史年表」によると、「一一八九年・平泉の藤原氏が源頼朝に滅ぼされ、その残党がエゾに逃れ、東は鵡川（胆振国勇払郡）から西は余市郡にいたる各地に定住した。この頃から古平にも何人か住むようになったと考えられる」とあります。

これが古平に和人が住むようになった始まりとしています。そして今月号で、それから約七七〇年後の昭和三十七年まで進んできました。

古平町史第三巻では主として昭和時代、古平町開町百周年に当たる昭和四三年までを所載しましたので、年表もそれ以降はあまり整理していませんでした。現在、その当時の資料を基にして年表の作成をしておりますが、その頃からカメラを手にする人が多くなった割に、意外と肝心の写真が残されていないことです。

古平町史年表の特徴として、写真を多く載せることを心がけておりますので、精々写真の収集に努めていきたいと考えております。今後またご協力のほどをよろしくお願いいたします。▽月日の経つのは

早いもので、もう平成二〇年の暦も半分が過ぎました。今まではだんだん日が長くなるので六月の好季節を満喫してきましたが、夏至を過ぎると、これからは日の短くなるのに追われるようになります。昔の人は「昼の目（縫い目）が一つづつ日が短くなる」と言っていました。確かに日常生活での実感のようです。

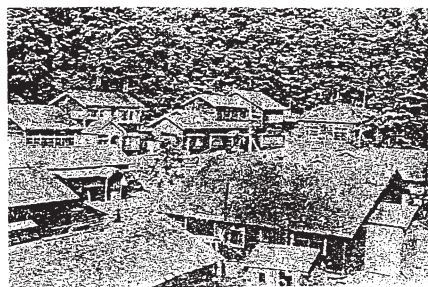
▽七月初旬は、例年ですと郷土の最大の年中行事である『古平琴平神社祭』ですが、北海道でG8・洞爺湖サミットが開かれることから、この時期に多い各地の夏祭りの日程もずれたようです。今年は七月二五日宵宮祭の海上渡御から、二七日の本社還御祭となるそうです。大漁・豊作を願いながら、好天に恵まれ、例年にも増して盛大な祭礼であることを願っております。

▽今月号の『せたかむい』から、古平町役場のホームページに掲載され、インターネットでも見られるようになりました。今までも、『せたかむい』を手紙代わりに送っておられた方もあったようですが、ついでにインターネットのこともお知らせしてください。『フルビラチョウウヤクバ』で検索すると見られます。

古平町史年表

昭和37年(1962) ~続き

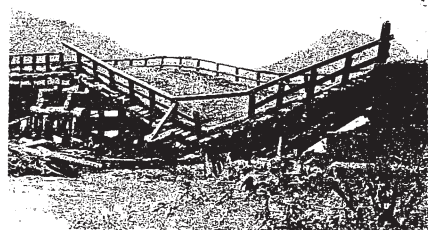
- 2/10: 古平河口でトドが捕獲され解体処分される
 2/24: 吹雪のため丸山町岬付近で漁船が座礁し沈没したが、乗組員は全員無事救出される
 3/28~4/1まで、テレビ局のストライキにより、テレビ放送が中止される
 3/10: 町内の風呂代が17円から19円に値上げされる(新地町古平町営浴場・浜町朝日湯)
 4/1: 稲倉石鉱山のマンガン鉱の減産に伴う従業員の異動により、児童生徒数が大きく減少する
 4/4: 古平中学校の15学級が認可される(外に特殊学級2学級) 生徒数665名
 4/25: 古平町長選挙で、伊藤由松が無競争で、4選される
 5/1: 古平中学校開校15周年記念式が行われる
 5/26: HBCテレビ「伸びゆく北海道」で、古平の海岸が観光名所として放映される
 7/24: 陸上自衛隊衛生隊が来町し、役場で町民の無料診療に当たる
 8/3: 台風に伴う豪雨により古平川筋で堤防が決壊し、水田や畑に大きな被害が出る。旧古平橋も取り付け部分が大破する。浜町方面では家屋の浸水被害が発生し、役場に災害対策本部が設置され、古平小学校が緊急避難所に指定される。古平出身の寿原代議士も見舞いと視察に来町する(函館本線も運休、9日ようやく全線が開通する)



↑ 稲倉石鉱山地区の住宅街



↑ 役場に災害対策本部が設けられ寿原正一代議士も訪れ、



↑ 古平川の増水により大破した木造の旧古平橋

※ 5月号掲載の年表を次のように訂正します。

削除 12/31: 沖町への国道で雪崩により沖町小野長太郎(当時51歳)が死亡する

追加して訂正 昭和13年12/16 歌棄村(現在の歌棄町)から沖村(町)への海岸道路で雪崩により沖村小野長次郎(当時51歳)が死亡する

<先日、沖町澤田勇一さんから連絡があり、当時の詳しい事情もお聞きました。ありがとうございます。>